

報告

I-LISS 2023 第7回国際会議に参加して (報告)

大城善盛, 前川和子

(元同志社大学教授, 元大手前大学教授・桃山学院大学特別研究員)

The 7th I-LISS International Conference 2023 (Report)

By Zensei OSHIRO, Kazuko MAEKAWA, Ph.D.

(Former Professor at Doshisha University, Researcher at St. Andrew's University)

I-LISS の第7回国際会議 (The 7th I-LISS International Conference) が、タイ東部のコンケン市 (Khon Kaen) に在る Khon Kaen University で、2023 年 7 月 20 日 (木) – 21 日 (金) の 2 日間にわたって開催された 1) (図 1)。大会のテーマは “Transforming Information and Library



図1 参加者集合写真 2) 筆者らは2列目中央

Education and Profession for the Next”であった。主催者は Khon Kaen University の Dept. of Information Science と I-LISS で、Korea Institute of Science and Technology である。

会議の進め方としては、事前に本文が 8 ページ以内に収まるようなペーパー (研究論文や事例報告等) の申し込みがあり、申し込まれたペーパーは覆面審査が行われ、受諾の返答をもらった人のみが当日、15 分の口頭発表 (エッセンスの発表) と 5 分の質疑応答、という形の発表が行われた。この国際会議は、これまでも同様な形で開催されて来ている。会議録を見ると、今回受諾の返答をもらった人は 45 人も居たようで、45 人の発表者が 2 日間にわたって発表を行った。

その他、基調講演が 2 つあった。また、企業からの経済的支援もあったように思われ、それらの企業の製品 (IT 関係) に関連して、“special presentation”と銘打った発表もいくつかあった。

日本の発表内容

私たちは7月20日の初日に発表を行った。大城の発表タイトルは“Some Issues of LIS Education for Public Librarianship in 21st Century Japan”，前川の発表タイトルは“Vulnerability of Information Education and Learning Opportunities for Working Adults in Japan and Presentation of Model Curriculum, by Nanami Oda, Kazuko Maekawa, Junichi Yane, and Tsutomu Sihota”であった。前川の発表は、発表タイトルが示すように、4人の著作の代表発表であった。2人の15分間の発表内容は殆どPPTに記してあるので、参考のために、少し手を加えてはあるが後方に付けている。5分間の質問応答に関しては、大城は2人のインド人から質問を受けたが、インド人の英語は難しく、質問の意味はあまり理解できなかったが、こんな質問かと思います、と言いながらの返答であった。前川の場合は、質問に対して正確にお答えができるかどうか自信がないのですが、と正直に聴衆に伝えた。すると、司会者のProf. Sudatta Chowdhuryがテーマの重要性を取り上げ、日本だけの問題でなく各国においても大切な問題であると熱く述べられ、質問時間を費やして下さったことが印象的であった。

因みに、大城のペーパーは“Best Paper Award”を授賞した。

大城と前川(たち)のペーパーは会議録3)で見ることができる。本誌会員の方が、以後の会議に投稿なさる時の参考にして頂きたい。

基調講演 1: Prof. Dr Gobinda Chowdhury

初日の基調講演者は、イギリスのストラスクライド大学 (University of Strathclyde) のコンピュータ・情報科学科 (Dept. of Computer & Information Sciences) の学科長の G. Chowdhury (図2) で、テーマは“Information and Library Science Education for the Next Generation Professionals



図2 Prof. Dr G. Chowdhury 4)

and Researchers”であった5)。特に印象に残ったのは、今後の図書館情報学の専門職(員)に課されている課題を次のように5つの分野にまとめたことであった。

1. Emphasizing professional perspectives and competencies (専門職的な視点と能力の重視)

- a) technology skills (テクノロジースキル)
 - b) communication skills (コミュニケーションスキル)
 - c) customer service skills (顧客サービスのスキル)
 - d) flexible and continuous learning skills (柔軟で継続的な学習スキル)
2. Transforming libraries into learning commons that (図書館をラーニング・コモンズに変革し)
- a) invite user communication and collaboration (ユーザーのコミュニケーションとコラボレーションを招く)
 - b) offer access to digital resources and technologies (図書館をラーニング・コモンズに変革し、デジタルリソースとテクノロジーへのアクセスを提供する)
 - c) support participatory learning and knowledge co-creation (参加型学習と知識の共同創造をサポートする)
3. Enhancing collection management with new and emerging forms and formats (新しい形や形式のコレクション管理の強化)
- a) Open access content (オープンアクセスコンテンツ)
 - b) Open access data (オープンアクセスデータ)
 - c) Linked data (リンクドデータ)
4. Integrating 21st century pedagogies and curricula that foster (21 世紀の教育学とカリキュラムの統合)
- a) Media & information literacy, critical thinking, creativity, and inquiry-based learning (メディアおよび情報リテラシー、批判的思考、創造性、探究学習)
5. Re-engineering LIS education and research to develop professionals who can (LIS の教育と研究をリエンジニアリングし、次のような人材を育成する)
- a) work in the evolving technology and global evolution (進化するテクノロジーと地球規模の進化に取り組む)
 - b) implement emerging technologies for value-added data and information services (付加価値のあるデータおよび情報サービスのための新しいテクノロジーを導入する)
 - c) contribute to the advancement of the Information field (情報分野の発展に貢献する)

基調講演 2: Prof. Dr Anne Goulding

2 日目の基調講演者は、ニュージーランドのヴィクトリア大学ウェリントン (Victoria University of Wellington) の情報管理学部 (School of Information Management) の教授 A. Goulding で、講演テーマは “Supporting Successful Educational Transitions for the Next Generation of ILS Professionals” 6) であった。興味深かったのは、情報管理学部の多くの大学院生が社会人で、仕事をしながら (職を持ちながら) オンラインで学位 (修士号) を取得すべく頑張っている状況を説明していたことであった。講演のメインテーマは、学生が大学院における挑戦 (アカデミック・スキル、批判

的思考力、分析的作文能力、時間管理)を過小評価していること、またオンライン授業に対する理解不足、オンライン授業においては直接的な人との接触が少ないこと(それは心理的不安要因になっていると指摘)を挙げて、それらへの対処法であった。その対処法としてのサポートは、

- 感情的な側面の認識
- 心のこもったサポート
- スタッフとサービスによるサポート

をあげていた。

※ 因みに、ニュージーランドやオーストラリアでは U.S.A. と異なり、学部課程でも図書館専門職の資格がとれる。

コンケーン大学と図書館ツアー

沿革

図書館ツアーの報告前に、当地で見聞きしたこと、同大学ホームページ 7)などを参照して簡単に大学を紹介したい。コンケーン大学は、1966 年タイ東北部の教育の中心地として設立された国立大学である。医学、工学、科学、農業、社会科学に重点を置き、2019 年の *Times Higher Education* では、社会的影響力においてタイで 1 位、アジアでは 15–40 位のランク、世界では 101–200 位のランクに位置づけられている。評価の高い大学であるといえる。キャンパスの広さは、東京ドーム 192 個分であると、当大学教員から聞いた。その広さのためか、キャンパス内に公道が敷かれ、車がひっきりなしにしかも高速で走っていた。

大学の規模: 学生数、学部など

4 つの分野に、学部は 19 ある。教職員は約 2,000 人、学生数は約 40,000 人である。

図書館ツアーで見たもの: 大学図書館の 1 つの未来

1 日目のスケジュールが終了した後、図書館ツアーの案内があり大城と前川は参加した(図 3)。出席者の中のかかりの人たちが参加したようで、2 つのグループでのツアー(図 4)となった。会場から車で分かれて運ばれ、入り口で 2 つのグループに分けられた。入り口には、ゲートがあり、入ってすぐ左手にカウンターも用意されていたが、特に貸出・返却の図書館サービスのためのカウンターではなかった。どこにそのサービスのカウンターがあるのか、とツアー中に注目していたが、とうとう終わりまで筆者は見つけることができなかった。入った建物は新館でその内部を見学したのであるが、その建物内には図書、雑誌等を見つけることができなかった。私たちが見学したのは、館内に 14 の広いスペース、机があったり無かったり、様々な形の椅子(ソファもあり)が規則的だったりそうで



図3 入口カウンター前 左端は副館長



図4 ツアーグループの集合写真

なかったりと並んでいた。雰囲気異なる14のスペースは、学生たちが思い思いに座っていた(利用しているというべきか)。各自が持ち込んだデバイスによって、その中に勉強すべきものがあり、自由に資料にアクセスしているようであった。つまり、講義に必要な資料はデバイスでアクセスでき、必要な資料の検索もデバイスで可能なのであった。各スペースには、充電ができる機器が用意されていた。小さなグループ用の部屋も用意され、分かりやすい所に空き情報が一目で確認でき、学生証をかざすと入室がすぐに可能となっている。グループ用の部屋の正面はガラス張りである。

旧館に少し図書と雑誌を見た。医学部関係の学生のために(他学部生も使用できるようだが)、バーチャルの手術室が体験できるスペースがあった(筆者も体験した)。

見学をして、日本の大学図書館と次元が異なっていることに驚いた。居心地の良さそうな図書館内で、たくさんの学生が思い思いの格好で存在していた(利用していた)。かなり前にカリフォルニア大

学の、様変わりした閲覧室についての報告を読み衝撃を受けた8)が、コンケーン大学図書館は初めから学生に場所の提供をしているのだった。2009年にアメリカのカリフォルニア大学図書館の衝撃的な変化とされたことが、2023年の今、コンケーン大学図書館でごく普通の風景となっていることに、読者はどのように感じられるだろうか。この図書館の状況がインターネット上で、どのように伝えられているかを帰国後調べてみたが、日本語のネット情報ではよく分からなかった。それ故この報告が、読者諸氏に正しく伝わることを願っている。

コンケーンでの観光と大会委員長の研究室

学会1日目に話しかけてくださり、その後も親切な対応をしてくださったコンケーン大学の Prof. Dr Knyarat Kwiecien に、観光の希望を伝えたところ「大丈夫まかせて。22日(土)朝9時にホテルのロビーで待っていてください」というお返事を頂いた9)。当日私たちのために大学の車が用意され(もちろん運転手も)、案内役の学生2人も同乗した。男子学生のコースさんと女子学生のノエさんだ。2つの有名な寺院見学と昼食が終わった後、教授からの指示とこのことで、私たちは教授の研究室に招かれた。大城が今年度から、新しい理事メンバーに就任したためと、「I-LISS – BEST PAPER AWARD」を受賞し、その賞状を授与するためであったと思われる。研究室には、教授と共に会長の Prof. Dr 呉東根がおられて、私たちは観光のお礼を述べた後、しばらく談笑する場となった(図5)。



図5 左から前川, Knyarat 教授, Oh 会長, 大城

Prof. Dr Knyarat Kwiecien は、今回会議の委員長の要職を担当した方であった。私はそれをしっかりと認識しないまま、彼女に様々をお願いをし、お世話になっていたのであった。彼女関連で、ResearchGateを知った。また、呉会長の指摘で、日本の研究者が日本語中心の研究成果の発信しか興味をもたず、英語での発信がおろそかになっていることを知り、危機感をもったのは私たちのみではないと考える。

会員の皆さまのご参考のために、今回発表に使用したパワーポイントを掲載しておく。ただし、枚

数は紙面の関係で、ごく少ないことをご承知ください。ご参考にされ、今後の活発な国際学会参加の一助になることを願っている。

本報告をまとめるにあたり、コンケン大学沿革について岡田大輔氏の協力を得た。深く感謝する。

注

- 1) iSchoolKKU, *The 7th I-LISS International Conference 2023*. <<https://iskku.kku.ac.th/I-LISS2023/>>. [引用日: 2023-09-13]
- 2) iSchoolKKU, *I-LISS 2023-Picture: DAY 1 (20 July 2023)*. <https://drive.google.com/file/d/1irasraRYB83E9K3murqPDLdTFDnpDLL7/view?usp=drive_link>. [引用日: 2023-09-13]
- 3) *Conference Proceedings on Transforming Information and Library Education and Profession for the Next (7th I-LISS International Conference)*. Thailand, 2023, <<https://iskku.kku.ac.th/I-LISS2023/programme.html>>. [引用日: 2023-09-13]
- 4) iSchoolKKU, 前掲 1).
- 5) Gobinda Chowdhury, “Information and Library Science Education for the Next Generation Professionals and Researchers,” *Conference Proceedings on Transforming Information and Library Education and Profession for the Next*. 2023.7, p.2. 当日のパワーポイントは同 Presentation にあり。
- 6) Anne Goulding, “Supporting Successful Educational Transitions for the Next Generation of ILS Professionals,” (Keynote Abstracts) *Conference Proceedings on Transforming Information and Library Education and Profession for the Next*. 2023.7, p.3. 当日のパワーポイントは同 Presentation にあり。
- 7) ““THE” announces KKU the First in Thailand for social dedication,” *Khon Kaen University*. <<https://eng.kku.ac.th/723>>. [引用日: 2023-09-14]
- 8) 石松久幸「今、アメリカの大学でライブラリアンと呼ばれる職業が絶滅しつつある」『出版ニュース』(2187), 2009.9, p.6–10.
- 9) 私たちのホテルは、コンケン大学が経営するバヤシタ・ホテルだった。

大城の PPT

Some Issues of LIS Education for Public Librarianship in 21st Century Japan

by Zensei Osiro
Retired Professor of Doshisha Univ. Japan

7th I-LISS International Conference 2023 (I-LISS 2023)

Place: Kohn Kaen University, Thailand

Time: July 20–21, 2023

Table of Contents

1. Introduction
2. Problems of the LIS Education Itself
 - 2.1 *Toshokan Hou (Library Act)*
 - 2.2 Academic Institutions That Offer the LIS Programs and the Students
3. Problems Which Has Derived (Resulted) From the LIS Education
4. Conclusion (Proposals for LIS Program for Public Librarianship in Japan)

1. Introduction

- * In this presentation, I discuss several issues (problems) of LIS education for public librarianship in 21st century Japan.
- * Some of them originate in the LIS education itself. And the others have derived from the LIS education.

2. Problems of the LIS education itself

2.1 *Toshokan Hou (Library Act)*

- * Japan has *Toshokan Hou (Library Act)* that concerns public libraries only and regulates establishment of public libraries, including qualifications of professional librarians.
- * The problem of the *Library Act* is that it regulates that even a junior college graduate can become a professional librarian.
- * This is a quite low educational requirement for professional librarianship, from United States' point of view of 'librarianship.'
- * Asahi Newspaper (most famous and credible in Japan) reported in 2014, that more than 50% of the cohort in Japan go to four-year colleges today."
- * In such a situation, it is hard to persuade employers of public libraries, which are boards of education of local governments, to employ LIS graduates as professional librarians, although JLA (Japan Library Association) argues that these graduates qualify as professional.

2.2 Academic Institutions That Offer the LIS Programs and the Students

- * According to MEXT (Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology), the number of academic institutions which offer the LIS programs in 2023 is as follows:

- 1) Total: 193 (152 four-year colleges and universities and 41 junior colleges).
- 2) 139 of these 152 four-year institutions are private.
- 3) 39 of these 41 junior colleges are private.

- * It is estimated that every year approximately 10,000 students will earn a certificate for public librarianship.
- * However, it is estimated that only 100 or less than 100 graduates receive their jobs in the public libraries each year.
- * Why have so many students enrolled in the LIS programs every year, knowing the difficulty of getting jobs in the public libraries?

* one of the reasons is that students want to acquire any kind of certification as a memento of college education since almost all college students can graduate without much study once they pass the entrance examination to colleges.

* We call these modern students as 'qualification-mania' (certification enthusiasts). Most of those students who are enrolled in LIS programs are not necessarily interested in librarianship.

* In above situation, many private colleges and universities offer LIS programs in order to solicit new students (candidates) to their institutions since it is easy to establish LIS program.

* MEXT requires that a college should have two full-time instructors when it establishes a new LIS program.

* However, MEXT rarely examines whether the minimum number of staff (instructors) are maintained.

* Another fact is that MEXT is not restrict in examining qualifications of the two instructors.

* Though an institution which offers a LIS program is obliged to report to MEXT every year, many colleges list in their annual reports names of the faculty who are not necessarily LIS majored.

3. Problems which has derived (resulted) from the LIS education (Staffing Problems of the Public Libraries)

* There were 3,316 public libraries in 2021 and the total number of staff of those libraries was 42, 772.

* The staff composition was as follows:

1) Full-time employees: 9,459

2) Concurrent employees (= staff also employed at other government sections: 1,100

3) Non-full-time employees: 13,629

4) Temporary employees: 4,068

5) Consignment staff (= staff employed by private companies): 14,516

* The list above shows that many non-full-time staff were employed in Japanese public libraries.

* It also shows that many staff (consignment staff) were employed by private companies.

* In fact, the number of library staff employed by private companies was the largest among those staff.

* Considering that a public library is established by a local government and should basically be managed by government employees, it is difficult to comprehend the logic behind the staff composition in Japan's public library system.

- * Japanese local governments suffered from economic recession in 1990s and began to use New Public Management (NPM) in the public libraries with the intent to be more cost-effective.
- * This is one of the reasons why so many non-full-time staff were employed.
- * However, the ratio of full-time vs non-full-time staff is higher in the public libraries than in other public sectors.
- * Therefore, the structure is not aligned with how other public sectors are organized.
- * Hence it is questionable why the public library system is structured with so many non-full-time employees.
- * Designated Manager System (DMS), which is a kind of NPM, was included in the Local Government Act revised in 2003.
- * Thanks to DMS, many public service sectors of local governments have now been managed by private companies.
- * Regarding public libraries, it is reported that 271 local governments had delegated the management of their libraries to designated management companies in 2021.
- * The total number of the libraries managed by these private companies was 632.
- * This is one of the main reasons why so many consignment staff were employed in the public libraries.
- * Can those designated management companies properly manage the public libraries? Those companies say 'yes.'

- * JLA puts most efforts upon circulation services. JLA think that it is the most important library service.
- * Designated management companies argue that they can easily manage public libraries if circulation services are most important.
- * They have often boasted that the libraries they have managed are among the best as far as the number of circulated materials is concerned.
- * JLA's position statement in 2018 is that all library staff should be full-time certified librarians.
- * This kind of discourses are negation of librarians as professionals from the point of view of American librarianship.
- * I believe that professionalization of librarianship cannot be made unless we believe that the library works are classified into two: professional and nonprofessional.

4. Conclusion

- * I above discussed several problems of LIS education for public librarianship in 21st century Japan.
- * As one of the methods solving these problems, I have proposed two kinds of LIS programs in my full-paper, considering its realizability in Japan. If you are interested in Japan's LIS program, please read my paper in the Proceedings. (END)

Vulnerability of Information Education and Learning Opportunities for Working adults in Japan and Presentation of Model Curriculum

Nanami ODA, Kazuko MAEKAWA , Junichi YANE ,
Tsutomu SIHOTA

The 7th I-LISS International Conference 2023

1 INTRODUCTION

1.1 Purpose of Research

- Japan has recently developed into an ICT network society.
- Computerization of administrative procedures using the Internet is progressing.
- In the field of school education, the initiative of GIGA (Global and Innovation Gateway for All) schools has been established by the Government and it is now partially realized.
- However, there is no such initiative for workers.
- **Particularly**, non-regular workers are in difficult situations in the recent information and telecommunications network society.
- Those non-regular workers have not acquired information skills, and may not be able to adapt to the ICT network society.
- We have proposed a model curriculum for information education and learning for adults.

4 RE-EDUCATION CURRICULUM

- From the surveys, it can be said that training sessions of information and learning for working people are focused upon basic operations of personal computers and smartphones.
- Therefore, It can be said that working people have not received enough information literacy education. It is one issue.
- Another issue is that, due to occupational and regional disparities, the amount of time and effort that working adults can devote to information education and learning is limited.
- Considering above situation, we have proposed a model curriculum for information education and learning for working adults.

Flow	purpose	methods and content	remarks
① introduction	By linking familiar events such as news and the environment with learning content, students are interested in learning. At the same time, understand why learning is necessary. In addition, confirm and review the understanding of the previous learning content to consolidate learning.	<ul style="list-style-type: none"> • Small talk such as news • quiz • Test of previous learning content 	
② development	main part of the learning content. Although the ratio will change depending on the unit and the content to be handled, we will practice using tablets, etc., exchange opinions and discuss, and learn from the perspective of learning literacy.	<ul style="list-style-type: none"> • Lectures using textbooks • Listen to videos and perform basic operations and literacy • Tablets and smartphones Practical Examining Using Phone • The learner himself/herself and the learner exchange of opinions 	Utilizing videos created by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology and mobile carriers
③ conclusion	Check the learning content and measure the degree of comprehension and the degree of learning fixation. In addition, I will follow up on the learning contents while watching the learners.	<ul style="list-style-type: none"> • Opinion presentation • Summary of learning content • Confirmation test 	

4.2 Evaluation of the Model Curriculum

- In order to measure the effect of the model curriculum, we propose to conduct evaluation for each course.
- The scheme of evaluation should be based on cost, location, format and scale, number of participants, learning content, learning outcomes and level of understanding, learner's motivation to learn, learner's evaluation and satisfaction, etc.
- We suggest that participants' needs, content of interest, participants' impressions will also be included in the scheme of evaluation.

5. CONCLUSION

- By making a survey on information education and learning for adults, we have found that its support system is not adequate.
- Although MIC has established an initiative of digital utilization and learning project, we have found that there is lack of learning content in the project.
- In the future, we hope that the working people will use our proposed model curriculum as a starting point for acquiring knowledge and skills in the information field.
- We also expect that local governments will build a learning support system in near future, based upon our model curriculum.